お知らせ

前号出題の子供クイズと詰将棋は締切を九月五日までとします。奮って応募下さい。（正解者に賞品進呈）

（創作）黒い河

三川　山口正勝

絹が撰炭機の騒音と炭塵の異臭に馴れた頃には一年が経つた。この一年の間、絹は何かをつかもうと焦りながらいまだに手探りでいる自分が哀しかつた。想念の向う側には確かな手応えがあつたが、何故か釈然としないものが残つた。

今日も、掘出された石炭が広いベルトに累々とひしめき、絹を圧倒するようなボリユームで押出してくる。この瞬時の停滞もなく流れる黒い河で、絹は自分の思考を確めるように、丹念に、硬を撰別するのである。

夫の死を契機として台頭した新しい概念が、慣習の中で育つた観念を崩壊させてゆく一つの過程であつたろうか？

絹は自分のうちに、こんな意識が強く息づいたのは「やつぱり社葬以後だわ……」と、思うのであつた。

その夜、有明海から吹きつけてくる夜霧が、炭住の外灯をつつんで陰気に暗かつた。三番方で何時もと変らず暗い霧の中を坑道に急いだ夫が、落盤のため重傷だ、というしらせが、夜半、絹を動顛させた。

人事係のしらせは、適確いんぎんであつたが、ショックが激烈で狼狽するゆとりがなかつた。人事係に促されて、辛じて立ち上つた絹が、病院にかけつけたとき、すでに屍体のていれは終つており、ほうたいだけが全身に白く、容貌さえさだかでなかつた。ただホルマリンの臭いだけが本能的に鼻腔をかすめた。

屍体を見護る同僚達が、塑像のようにだまりこんでいる中で、人事係の理性的な乾いた声が絹を促した。

「奥さんこちらえ……」

絹は感覚が麻痺して立ちすくみ「あなたツ！」と、すがろうとしたが、蒼白い頬がピクピクけいれんしただけで――顛倒した。

絹は人事係のしらせがあつたとき、そのただならぬ気配に、もしや！という不安があつた。それが現実となつてガクンと来たのである。

「お亡くなりになりました……」白いガウンをつけた分院長の順田が沈痛な声でこういつて眼鏡の顔をそむけた。――無論、夫は落盤による即死だつたのである。

社葬には盛大な花輪や果物が供えられ、焼香と読経の厳粛ななかで、鉱長の弔辞が読まれたが、そこには葬送のためのばん歌にしてはそぐわないそらぞらしさがあつた。だから絹は、何の感慨も湧かず、ただ空しい時間の消耗でしかなかつた。

このしらじらしさは何故だろうか？どの葬儀にも増して花輪が飾られ、祭場にながれる厳粛な読経は、しゆうしゆうとして参列者の肺腑をゆすぶるに足るものであるに違いない。

だが、この葬場を支配する空ぞらしい雰囲気……。これはもう、絹などには無関係な、会社の単なるビジネスではなかつたか？そしてあの敬虔な読経すらも……。

……こうしている間も坑内で誰かが死ぬ……すると又、誰かの手で同じ葬場が再現される。寺院の門前に乗りつけた高級車を下りた鉱長が、今日と同じように弔辞を読む……。それには決つて「こんな惨事を二度と繰り返さぬ……」と、霊前に誓うだろう！そして又惨事が……。

絹は漠然とした思考のなかで、これは既に会社のビジネスを超えた、偉大なるカリカチユアではないか？と、思つた。

しかし絹は、この日を契機として、夫の死が確実に自分の胸にすわり込んだことを意識した。

殉職者の家族は即時採用の協定があつたので、以後絹は撰炭婦であつた。

親戚は実家に帰るよう勧めたがすでに両親のいない実家は、絹にとつてやすらぎの場所ではなかつた。執拗に勧めるこの人達は、夫の命の代償の労災金が目あてであつた。絹はそんな親戚が疎ましく反ぱつもあつたのである。

だが絹は容易に仕事に馴染めなかつた。生来の無口も手伝つていたが、社葬以来の絹の胸に一つの想念が生きつづけていた。それは単純なもののようでもあつたし、絹などには手に負えない巨大なもののようでもあつたのである。

そんなとき、夫を炭車事故で亡くした同僚の貞が「おどんも親父がケ死ンだ時や、あんたとおんなじやつた。そりばつてんクヨクヨしたつちや親父が生き返る訳ぢやなし、お面白かごつなつとんいうて暮さにや……」諦観しきつたふうにこういつて、ワツハツハツハ……と、男のように笑つた。

絹は、貞のように単純に諦観できない自分の想念を振り返つた。

絹達の現場には三十人ばかりの同僚がいたが、みんな夫を坑内の事故で亡くした人達であつた。とき折り、絹がハツ！と、なるようなヤユが飛んだが、同性で気心の知れた間だけに、ヤユが尖らず大概のことは冗談で終つた。

折から国会革新議員団による遊説がこの街の市民会館で開かれていた。絹は一人きりの無聊もあつたが、自分の想念を確めたい欲望があつて聴きに行つた。会場は立錐の余地もなく、じつとしていても汗がにじんだ。

弁士は、みいけ新聞等によく見る名前の人であつたが、軍事基地をテーマーに政府の反動性を力説した。なかでも中国視察を終えて来た弁士は、具体的に例を挙げ、革命後の中国が如何に進歩発展の段階にあるかを訴えていた。それはこの人の訪中の実感であつただけに、リアルに聴衆の胸を打つたのであつた。

絹は〃革命〃とか〃資本主義発展の不均等〃などの言葉は判らなかつたが、家路を急ぎながら「やつぱり聴いてよかつたわ」と、思い自分の想念の向う側が、にはかに明るくなつたような気持がして星を仰いだ。

――この春の賃闘が終り、組合ではアップされた金額の配分案について会社と交渉中であつた。だが了解点が見出せず遂に実力行使に入るらしかつた。そんな或る日休憩所で絹達が休んでいると、組合より情宣があつた。教宣部長が立去つた後で、誰かが、又、ストか？と、なげやりな口調でいい放つた。

すると、一方のリーダー格の浜が、誇張した甲高い声をまき散らした。

「スト、ストつて！組合やストばつかしやつてチツタうちどんがこつも考えて貰わにやー――」浜の勢いに押されて二、三の者が肯定するようにうなずいた。

「そげんいうたつちやー、組合やうちどんがためにストすつとぢやろだい……」貞がとつさにこういつたが、立上つた浜が前より高い声でいきり立つた。

「アンタアそげんいうばつてん指名ストば考えて見ンのツ！あん時や借金負うたが！一年中、何ストだ、反対だチウテたまつたモンネツ！」

絹は貞の逆襲を期待したが、こんな時の貞は意識だけが先走つて適当な言葉に窮するらしかつた。浜は得意気にみんなを見回したが今度は誰もうなずかなかつた。

そのとき、絹の身体を突き抜けるような勢いで想念が走つた。「そうだわ、自分のできることには勇敢になるべきだわ」と思い、絹は本能的にしやべり出していた。

「みんなもつと自分の境遇を考えたら、ストの止むを得ない事情も判るんじやないかしら。貞さんも、スト反対のお浜さんだつて、炭車事故で大事な夫を奪われたんだわ。この私だつて落盤で夫を失つたわ、だけど、私達の夫が不注意のため死んだのではないと思うわ！設備が悪かつたんだわ！設備不完全よツ！そうだわツ！みんなこれが原因だわツ！貞さんの場合だつてそうよツ！坑道に非常ベルが備えつけてあつたら死なずに済んだんだわツ！。うちの場合だつて、あのとき同僚の方がいつてたわ！組合も安全委員会もしよつちゆう勧告していたのに、夫の現場では坑木不足で通木がなかつたつて話よツ！みんな会社のサブスタンスのためだわツ！。この前だつてそうよ！何度交渉しても支給しなかつた手袋を、出すようになつたのもみんなが心を合せて、この部屋で坐り込んだからなんだわ！その時、労働部長が団結の力は強いですねつていつてたわ！そうよ団結だわ！私達は団結以外にないんだわ……！」

ここまで一気に説いた絹は何故か涙がハラハラとこぼれた。絹が再び口を開こうとしたとき、始業のベルが鳴つた。そのためでもあつたが、浜は何にもいわずドアーを押して外へ出た。みんなも就業のためドアーの方へ続きながら、絹に注いだ瞳は一様に好感のそれが感じられた。絹は立ちつくした姿勢のままで無駄ではなかつたわ無駄ではなかつたわ……と、一心に反すうしていた。

突然！お絹さんツ！というなり貞がごついゴム引の手袋ごと抱きついて鳴えつを始めた。

運転を始めた撰炭機の単調な響きが、絹達が相擁した休憩所まで断続的に聞えて来た。二人は新しい気持で自分の持場に急ぐ……。

絹の前を地熱を抱いた石炭が、累々とひしめきながら、一定のボリユームをなして流れてくる。この黒い河は今日も、空間の秒刻を争つて偉大な資本の歴史を形成してゆく……。だが、秒刻に創られてゆく歴史の堆積は、現代のメカニズムをもつてさえ否定できない新しい足音を孕んでいるのではないだろうか……。

そうだわ、それに違いないわ、と自分の思考をつかんだ絹は、思はず口走つて傍の貞を振り返りニッコリした。

（了）

【評】

文体が少し固すぎて観念語が多くドグマな表現が目だつ。イメージが作者の頭の中でも十分具象化されてないようである。絹の考え方にも作者の生な思想が入りこんでいて、絹という女が自然なあり方で描きあげられていない。しかしこの作者は思想的に高いものをもつているようであるから、今後の勉強次第でしつかりした作品をものにすることができると思う。

映画　＝追想＝　皇女をめぐる陰謀を描く

◈ロシア革命（一九一七年）の犠牲から奇跡的にのがれ、いまなお生存していると伝えられるロマノフ皇朝最後の王女アナスタシア姫にまつわる恋と陰謀を描いた映画

アナスタシア姫に関することは事実に謎いているといわれるが、いまのところはつきりしていない。永久のナゾとして残されるらしい

ロシヤ革命前、皇帝ニコラス二世は三人の皇女のため三千万ドルに相当する金を外国銀行に預けてあつた。その一千万ドルはアナスタシアの分として英国の銀行に入れてあり、一九二二年ごろ殺されたはずの姫の生存の噂がたちヨーロツパでセンセーションを起した。しかし一千万ドルの金は依然として英国銀行に眠つている。

×　×　×

【ストリー】

白系ロシアでパリに住んでいる旧将軍ブーニン（ユール・ブリンナー）を首謀者とする四人が、パリ在住の白系露人の元貴族たちに姫が生きていると宣伝して、資金を集め、彼らから姫に関するいろいろな知識を得る。そして、ナゾの女（イングリツド・バーグマン）を姫に仕立てあげる。この女は幸いにも過去の記憶を殆んどなくし自分の名さえ知らぬ。ブーニンに教わるうちに女もアナスタシア姫になろうと努力する。

彼らは巧みな演出によつてパリに住む旧ロシア宮廷の要人たちに引合せる。しかし元待従長は姫を信じない。思わぬ障害にあつたブーニンは、最後の切札として姫の祖母に当る皇太后（ヘレン・ヘイス）に会わせようとする。皇太后は甥のポールとデンマークに住んでいたが、姫はこのポールと許婚の仲だつた。だがこれまで姫と称する偽者にたびたび会わされた皇太后はブーニンの要求を断わる。

ポールは姫と会い許婚者のアナスタシアとは信じないが、美しい彼女に魅せられ再会を約した。

一方ブーニンはポールに姫の真疑は問題でない。目的は金だと打あける。ポールも金に不自由している折だから皇太后に引合せることを約すが、断られる。

曲折の末、皇太后は姫とあつて本物だと信ずるようになる。ブーニンは姫に思いを寄せており、姫も心憎からず思うようになつている。一方、ポールは金目的で婚約を発表しようとする。そこでブーニンは総てを諦めて暇乞いをするが、皇太后は女性の感でこれを見抜きついに粋をきかして二人を結びつける労をとつてやる。

（四日よりセントラルで上映）

長屋太平記

中村かめお

囲碁教室（23）

ヒラキ（1）

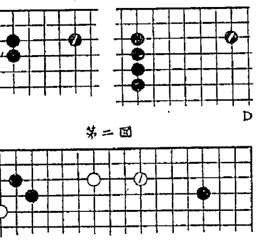
前に隅のシマリからヒラキについて簡単に触れましたが、ヒラキはシマリからのそれとは限らず既に打つてある石を基点として、第三線又は第四線上に或る距離をおいて飛ぶことを云います。その意味は地域を開拓したり、勢力を伸展させたり、或は辺に根拠を作るなどです。

ヒラキの原則

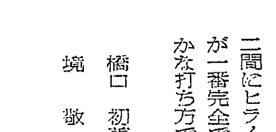
ヒラキの広狭は、基点となる石の勢力の強弱に比例するのが原則で、強ければ広く、弱ければ狭くヒラいて、敵の侵略を受けないようにしなければなりません。

第一図はヒラキの原則を示したものです。即ち一子の石からは二間に、二子立つた石からは三間に、三子立つた石からは四間に、四子立つた石からは五間にヒラくのが原則です。そしてヒラキの最大限度は五間までとされています。それは五間までのヒラキでは、その間に白が打込んだときに、A図の二間ビラキの余地がないからです。第一図Aの第三線を主とした二間ビラキは、辺における基礎の形でこう打てば連続した石で地を囲うことができ、周囲の状況にもよりますが、大体このままで生きる可能性、つまり根拠をもつており、容易に攻められない形です。

第二図のように両隅に黒の勢力のあるような場合に、白1と二間にヒラくのが一番完全で確かな打ち方です



第一図



第二図

橋口　初義
境　敬一

木いちご句会

原田養蚕所吟行

宮浦鉱木いちご俳句会は八月十一日午前十時より花園町原田養蚕所吟行句会を開催駛馬町加藤香月居にて披講。以下当日の主な入選句

柔細く細く夏蚕は育つなり　　中野春暁子

一と月の夏蚕の生命桑刻む　　今村　隆一

二令とて未だ静かに夏蚕宿
二令の蚕大きな頭ふり立て　　加藤　香月

蚕より夏蚕は楽と桑刻む
桑筵洗ひ干したる根ほだかな　　荒金　久平

上ぞくも間近か不眠の蚕屋ごもり
食ひ込の早き雄蚕ははや眠り　　古賀　邦夫

蚕屋草履赤緒の少し汚れいし
暑き日は蚕屋に水まき夏蚕守る
大籠に小籠を入れて桑つみに
ふすまごし夏蚕桑食む音しきり　　猪本　柳紅